

松本清張全集 35

松本清張全集 35

文藝春秋

松本清張全集 35

或る「小倉日記」伝

定価 1400円

1972年 7 月20日第 1 刷

1978年 4 月15日第 4 刷

著 者

© 松本清張

発行者

檜原雅春

発行所

株式会社 文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町 3

電話(代表)03—265・1211

印刷所

凸版印刷株式会社

落丁乱丁はお取替えます

湖畔の人	185
贗札づくり	169
火の記憶	155
菊枕	139
戦国権謀	119
啾々吟	95
梟示抄	75
或る「小倉日記」伝	49
くるま宿	35
西郷札	5

腹中の敵	367
山師	349
笛壺	333
赤いくじ	311
面貌	295
特技	283
恋情	257
断碑	229
情死傍観	217
転変	199

解説 桑原武夫	529
あとがき	521
張込み	505
奉公人組	493
青のある断層	471
廃物	459
柳生一族	443
石の骨	421
父系の指	395
尊厳	383

装 幀 伊 藤 憲 治

西鄉札

去年の春、私のいる新聞社では『九州二千年文化史展』を企画した。秋には開催の予定で早くからその準備にかかっていた。私は一カ月間つづけて九州中をかけ廻り、大学の図書館や寺や古社、旧家をたずね出品資料の蒐集につとめた。成績はよい方で、長い出張が終る頃には大体の目算をつけて帰ってきた。

出品の中には国宝もあるし、いわゆる門外不出のかけ替えのない重要品もあるので、その取扱いや輸送に前もって万全の方法を講じねばならなかった。その計画のため概ね出品の決ったところで品目のあらましをリストに作ってみた。すると出来上ったその表を一瞥しただけで、予期以上の成果ということが分った。殊に切支丹物では今までにな

い逸品が見事にならんだ。

「おい、これは何だ、西郷札とは何だ？」

と突然若い部員がリストを見ていった。四、五人の目がそれを覗き込むと、そこには、

一、西郷札 二十点

一、覚書 一点

としてあった。私にもそれは分らなかった。

「誰だい、これを扱ったのは？」

とたずねると、リストを作った男が書類綴を出して繰っていたが、

「あ、それは宮崎の支局から廻ったものです。先方から出品を申込んだことになっています」といった。

綴込みの手紙を見ると支局長のE君からで、「宮崎県佐土原町、田中謙三氏より申込み委託を受く。近日発送の予定」としてある。

それにしてもこの『西郷札』というのが分らなかった。名称から見ても西郷隆盛に関係あるらしいことは分るがそれ以上の知識は誰にもなかった。なかには西郷を崇拜する地方の一種の信仰札だろうと云う者もいた。しかし出品を申込むくらいだから史的価値のあるものだろうと反対意見を出す者もいる。遂に誰かが給仕を走らせて調査部から百科事典を借りて来させた。富山房版の同事典には次の通り出ている。

さいごうさつ『西郷札』——西南戦争ニ際シ薩軍ノ発行シタ紙幣。明治一〇、西郷隆盛率兵、集ルモノ四万。(中略)同年四月熊本ニ敗レ日向ニ転戦スルニ及ビ鹿児島トノ連絡ガ絶エタ為、遂ニ六月ニ至ツテ不換紙幣ヲ発行シタ。コレガイハユル西郷札デ寒冷紗ヲ二枚合せ、ソノ芯ニ紙ヲ插ンデ堅固ニシタ。十円、五円、一円、五十銭、二十銭、十銭ノ六種。発行総額ハ十万円ヲ下ラナカツタト云。額面ノ大ナルモノハ最初ヨリ信用ガ乏シク小額ノモノノミ西郷ノ威望ニヨリ漸ク維持シタガ薩軍ガ延岡ニ敗レテ鹿児島ニ退却スルヤ信用ハ全ク地ニ墜チ、為ニ同地方ノ所持者ハ多大ノ損害ヲ蒙ツタ。乱後コノ損害填補ヲ政府ニ申請シタガ賊軍発行ノ紙幣ノ故ヲ以テ用イラレナカツタ。(津田)

これで疑問は解決した。これは薩軍の軍票のことである。

恐らくこの出品者の父祖もこの不換紙幣をかかえて『多大の損害を蒙った』一人なのであろう。その子か孫かが家に残っていたものを出そうというのである。西郷ふだと読んだ連中は笑い出した。

この西郷札のことはそれなりに忘れられて、われわれは開催準備に忙殺された。夏も終り秋風が立っていた。社告も出たし、もう時日がなかった。私は連日、鉄道や運送会社の交渉やら会場の陳列プランに没頭した。社会面では出品の解説めいた記事を連載しはじめた。

ある日、企画部員が笑いながら、

「来ましたよ、来ましたよ、西郷ふだが」

といって小包を置いて行った。宮崎支局から原稿便で着いたものらしい。丁度手の空いている時だったので、すぐにそれを開いた。小さい桐の木箱があり、そのなかにいわゆる西郷札が入れてあった。百科事典のいう通りのものである。長さは四寸ばかり、幅は二寸ぐらいだろう、仙花紙のような薄い質の紙を中に目の粗い寒冷紗が貼り合せてあった。種類にしたがって黄色や藍色も昨日刷り上ったばかりのように新しかった。よほど保存を丁寧にしたものと思える。表は地に鳳凰と桐花を圖案し金額と『管内通宝』の文字の下に『軍務所』という印がある。裏を返すと、『此札ヲ贖造スル者ハ急度軍律ニ処スル者也、明治十年六月発行、通用三ヶ年限、此札ヲ以テ諸上納ニ相用ヒ、不苦

者也』とあった。

この西郷札とは別に桐油紙に包んだ分厚い帳があった。これが目録にある『覚書』であろう。菊判くらいの大きさだが三百枚くらいの和紙を二つに折って綴じ、毛筆で細かい字がぎっしり書き込んであった。紙の色は茶色にすすけていた。

私は一緒に添えてある支局長のEが私に宛てた手紙を開いた。

「(略)西郷札は田中氏宅に所蔵の分より二十枚ばかり撰って送ります。別に覚書がありますが、これは田中氏の祖父の知人が書いたもので、この人が西郷札の製造にも関係したそうです。小生は内容をみていませんが、田中氏の話では種々経緯がかかれてあって面白いそうです。内容を要摘して目下掲載中の解説記事にでも廻したら如何ですか」

もう一度、古い分厚な帳を取り上げて、はじめの方をめぐると別に題名らしいものはなく、

日向佐土原土族 樋村雄吾 誌す

明治十二年十二月

とあった。

私はこれを家に持って帰って読んだが、思わず夜を徹して読了した。その結果、社会部にも廻さず、従ってE君の希望する記事にもならなかった。この内容を宣伝記事の材料にするには忍びなかったのである。

私は近頃はない昂奮に駆られず、田中氏宛に手紙を出した。それは同氏も新聞記事にして欲しい意向があるように思われたのでその断りと、その『覚書』を自分の手で他の機会に発表したいというその許しを乞うたものであった。間もなく田中氏からは返事が来て私の身勝手な申出でを諒として、いいようにしてくれとあった。

『九州二千年文化史展』の開催中は、この『覚書』は西郷札とならんで陳列され、札の方は珍しがられたが『覚書』には特に注意を向ける者もなかった。

会も無事にすんで出品を田中氏に返す前に私は『覚書』を全部筆写した。こういう次第で、士族樋村雄吾の手記を発表する段となったが、そのまま現代の活字にするには勿論あまりに文章が古風であり、明治調の一種の風格はあっても今の世の人には馴染めない。

その上、その全文は前にも云う通り浩漚^{こうそう}だから思い切って縮める必要がある。結局この内容を私の文章に書き改めて、何だか私の『樋村雄吾伝』のような形式となった。といっても別に他の文献をせんさくして参照した訳ではなく、ただ『覚書』通りに書いていったに過ぎない。

『覚書』の主人公は無論樋村雄吾自身で『余』という第一人称で書き表わされている。これも私の書き方では不便なので、樋村雄吾という名前通り第三人称に改めることにした。

前置きが長くなったが、樋村雄吾は日向国佐土原に生れた。佐土原は宮崎市からほど近い。旧領は島津氏の支藩である。父は喜右衛門といい三百石の藩士であった。母は、同藩の内藤氏より来てつねといったが不幸雄吾が十一歳の時死去した。ほかに兄弟がなかったから彼は母の愛も同胞の情愛も知らずに育った。喜右衛門は彼が十六歳になるまで後添をめとらなかつたので五年間、彼は父の手一つに育てられ、一切の教育も父の手によった。

雄吾が十二歳のとき御一新が行われ世は明治となり、それから四年たつて突然断行された廃藩置県で父は世禄を失った。廃藩置県は西郷隆盛が中心となったもので、喜右衛門の本藩の当主島津久光を激怒せしめたという。とにかくこれによって収入の途が絶えたので城下を去る二里の土地に田野を求めて百姓となった。しかし雇人数人を入れて耕作に従わしめたが自らは畠に立つことはなかった。

この年すすめる人があつて、父喜右衛門は後妻を入れたが、これが雄吾の第二の母である。この新しい母には連れ子があり、雄吾とは五つ違いの女の子で妹となる訳であった。喜右衛門が後妻をもらつたのは恐らく新しい世が肌に合わず、百姓として余生を楽しむ気持になつたからかも知れない。

この母が士族の出でないことは年少の雄吾の目にも何と

なくくだけたその物腰で分った。大体、島津領内は士族平民の区別のやかましいところで、近年までその風習が残っていたくらいである。ましてその頃は両族の平等結婚は殆どなかった。それを平民から而も連れ子まであるものをよんだのは、いよいよ喜右衛門が世を遁げたのか、それともこの後添が氣に入ったからであらう。恰もこの年八月には華士族平民婚嫁許可令が出ていた。新政府を嫌った喜右衛門が真先に新法令を實行したのは皮肉である。

家の中は何となく艶めかしくなった。母は父の年齢に合わせてつとめてじみな身装をしたが三十五歳の容色は争えず、また、新しく雄吾の妹となった季乃も人が見て可愛いと讃める顔立ちであった。

ずっと女氣のない家で育った雄吾はこの二人がきて家の空氣が軟らいで楽しかった。しかし素直にこの感情を二人の前に出すには後めたいものを感じて何となく拗ねた態度に出ていた。季乃は雄吾を兄さまといって慕ったが兄から酬いられるものは邪険な冷たい仕打ちであった。しかし心から冷淡であったかは疑問で、後年のことを考え合せるといろいろ想像出来るのである。

この間『覚書』の原文には大した記載はなく、ただ月日が水のように流れている。

季乃の美しさは年と共に顕われて佐土原でも評判となった。雄吾が二十一歳、季乃が十六歳となった正月は、明治十年であった。

早々雄吾は鹿兒島の親戚の家に年賀のために赴いているが、これは恐らく表面の理由で実は既に物騒となった鹿兒島の情勢を偵察に出かけたものと見える。

来てみると聞いた以上に形勢は緊迫していた。もうこの時は公然と戦争準備をしていたのである。雄吾は蒼惶として佐土原に引返した。この時分父の喜右衛門は病床にあって雄吾は詳しい報告はせずに、近日西郷先生について上京するからとその許可を乞うた。喜右衛門は顔を天井に向けたまま、一口もその理由をきかずにうなずいたが、万事は分っていたのであらう。

雄吾は別間に母を呼んだが、季乃は折悪しくその二、三日前から母方の親戚に向向していたので、別れを云うことが出来なかった。原文には何とも説明がないが恐らく心残りのするものを感じたであらう。

雄吾は家重代の銘刀をたばさみ鹿兒島に駆けつけたが、東上軍の編成の所屬は三番大隊で隊長は永山弥一郎であったと彼は誌している。

二

二月十五日、西郷隆盛は政府詰問の理由で寒風の吹く鹿兒島を精兵を率いて出発したが、これから先のことは普通の歴史にある通りで詳しく書くことはない。

『覚書』の筆者もその克明な筆で鹿兒島城包圍から植木方面の戦闘を叙しているが、別段関係もないから略する。た

だこの筆者のために彼が勇敢に闘ったことを記しておくことにする。

三月十九日、さしもの薩軍も田原坂の嶮を背面攻撃で官軍に奪われたことが大勢の決する岐れ目となった。これより人吉に退き遂に日向路に奔り、主力が宮崎一帯に集結したときは、も早鹿児島との連絡は絶えていたのであった。

薩軍が紙幣発行をやったのはその頃である。その製造所を宮崎郡広瀬に置き、造幣局総裁という格には桐野利秋がなったが、工事は昼夜兼行で行われ、監督には池上四郎が当り、実際の仕事は佐土原藩士の森半夢（通称喜助）が運んだ。職人は三十人ばかり使ったようである。兵站方に金が少しもないので、この造幣のことは大急ぎですすめられた。

樋村雄吾はこの新設造幣局の所属となったが、それがどんな役目か、彼自身が語る『覚書』にははっきりしない。しかし森が佐土原藩士だから同藩の雄吾をひき抜いて来たであろうことは想像に難くない。恐らく森の助手のようなことをしたのであらう。

この紙幣の体裁は前に記したから繰り返さないが、薩軍はこれを以て近在の商人や農家から必要な物資を得ようというのであった。十銭、二十銭札はともかく、五円、十円という高額札は発行のその日から頭から信用がなく、皆それを受取ることを渋った。だが薩軍が実際に使用を望んでいるのはこの高額札の方だから、半分は威嚇でこれがどん

どん商人達に押しつけられて食糧や弾薬と変った。遂には兵士達は隊を組んで富裕な商家を訪れ、僅かな買物に十円札を出し、太政官札のつり銭を受取るという手段をとった。

この紙幣の性格を語るによい材料が明治十年十月の東京曙新聞に出ている。当時の賊軍に対する記事だから少し悪意のあるふざけた報道だが、薩軍紙幣の一端を説明している。

「桐野利秋が日向宮崎にて賊徒が濫製したる金札四百円を投出して齒を染めさせたる城ヶ崎の芸妓は棄て去る方より四百円の負債ありしかば右の金札を受取るや（略）これではよく御勘定をと彼の金札を差出したるにイヤ此札ではと貸主が額にしわを寄せしが、あなたそんなことが桐野さんに知れましたら人切り庖丁の御馳走がまゐりませうぞとおどし付けられ、不用の札と承知し乍ら、命惜しさに勘定をすましたりといふ（略）」

この紙幣はどのくらい刷られたか。一寸はつきりしたことは分らないが二十数万円くらいではなからうか。確かな文献を知らないから分らないが『覚書』ではそのくらいの数字になっているし、明治十年八月二十四日の大阪日報は「賊は贋札紙幣を凡そ二十四万余円製造したる由なるが、その中、十四万円を流通し、残り十万円はも早使ふ能はず、そのまゝ積重ねてあるといふ」とのせているから、まず大差ないであらう。その「残り十万円はも早使ふ能はず」と

あるのは恐らく軍務所のある宮崎が危険となつて立退かねばならなかったからであらう。七月十日日向小林が敵の手に落ち、次で二十日都城が陥落すると、宮崎は直接脅威を受けることになったので本営を延岡に移し、造幣所も閉鎖となった。

しかし官軍の追撃は急速で二十八日早くも大淀川南岸に到達し、翌日は之を渡河して宮崎に入り旧県庁を占領した。薩軍は戦闘しつつ佐土原、高鍋、美々津と退却をつづけ、遂に延岡の北郊長井村に本営をおいた。これが八月十四日のことで、官軍も各道より集つた諸軍と合して延岡に悉く入つたのであつた。

十五日は長尾山一帯の戦闘で、熊本以来最大の激戦といわれる。官軍は長井村を衝くため隣接の熊田を奪おうと兵を稲葉崎にすすめたが猛烈な薩軍の抵抗に会い、一時は危険であつた。この日は西郷自ら陣頭に立つて指揮し桐野、別府、村田、池上、貴島などの本営付の諸将がみな第一線に働いたから薩軍の士気大いに揚つたという。

樋村雄吾は西郷のいる和田峠附近で闘つていたが一弾が彼の右肩を貫いたため倒れ、後退して長井の病院に入った。病院は民家を三軒借りていたが、昨日以来の戦闘で傷兵が充満している。

官軍は後統部隊の到着で総攻撃を以て長尾山附近を占領し、十六日には完全に薩軍を長井村に包囲してしまつた。そこで脱出を図り、背面の山をぬいて三田に出で、豊後か

薩摩に行こうとする策を立てたのは、何度も軍議を開いた末であつた。有名な可愛岳突破である。このとき傷兵は置いてゆくということになり、西郷隆盛は病院長中山盛高を呼んで病院の屋根の上に高く赤十字の旗を掲げさせた。病院の攻撃は万国公法の禁ずる所だから官軍もこれは守るだろうというのである。樋村雄吾は肩の負傷を忘れて志願し、西郷の一行に加わっている。

薄暮、西郷は本営となつてゐる児玉家の庭前で陸軍大将の制服や重要書類をことごとく焼いた。一切の準備をおえて夜十二時、ひそかに可愛岳に出発した。前衛は辺見、河野が当り、西郷は桐野、池上に護られて山かごに乗つて登山した。かごかきがあまりの道の峻しさと西郷の重量に苦しんで号泣したということである。樋村雄吾は貴島清らの後衛に加わつたが、鹿兒島を出るときの四万が今は総勢五、六百人にすぎなかつた。

暗中、この可愛岳を登ることは非常な危険で、断崖に至るところに口をあき、一步道をあやまると深い谷底に落ちる。官軍もまさかこんな所に薩軍も来まいと油断していたくらいだからその峻嶒は思ふべしである。前衛は土地の者の案内で途中、木の枝や笹などに白紙を結びつけて後統部隊の道しるべとした。

誰も一語も発せず、黙々として闇の中を木の根を手がかりとし、岩角を足場として登っていく。遙か眼下に官軍陣営の篝火が点々として星を連ねたように輝き、それが今ま

で見たことのないように美しい。

三

雄吾はだんだん息苦しくなってきた。肩の傷が非常な痛みとなって圧迫してくる。山を登る激動で傷口が再びあいたのであろう。次第に足が鈍くなり、遅れがちになって来た。

どのくらいたったであろうか。急に雄吾は自分の周囲に人影がなくなつたことに気づいた。変だと思つたときはいつか部隊からはぐれて別な方角を進んでいたものらしく、どこを探しても結んだ白紙が見つからない。耳を澄ましても人の気配もなく、大声で呼ぼうにもこれは禁じられていることである。

彼は右にゆき、左を追つた。といつても熊笹や自然林に近い密生した樹の中では道のような道はなく、氣ばかりあせる。こうして雄吾は何時間か山中を彷徨した。

眼は利かず、足場は見えず、肩の傷は殆ど我慢以上に疼く。も早、味方を追うことも断念してその辺の笹の中に転がると、自然に氣が遠くなつていった。

夜があげてきて運のよいことにはこれがいつか可愛岳をはずれて北側の山に出ていたことである。それでなければ追撃の官軍に捕るところであつた。雄吾にとって更に幸運は、炭焼きに拾われたこと、この炭焼きが村の素封家伊東甚平の家に抱え込んだことである。

伊東家では雄吾を官軍側に届けなかつたばかりか実に行届いた介抱をしてくれた。伊東家は昔でいう郷士の家で、その先祖は島津に仕えている。一体薩摩藩には『麓』と呼ぶ一種の外衛制度がある。これは他領に見ない特殊のもので記録に現われるのは文亀、天文の頃からだそうだが、『麓』即ち郷士の居住地で、鹿児島本城に対して外城のような意味をもっている。この制度は昔、豊臣秀吉のために一時は九州全土にわたつていた封土を減ぜられて薩隅二州と日向の一部に限られた島津では、多数の武士の処置に困つた結果これを各地に配したのが起りだという。この伊東家もその『麓』の一つの岐れであつてみれば、雄吾を庇護したことも祖先の血といえよう。

こういう家柄だし、また事実医者にも遠いので負傷や病氣に対しては伝来の製薬法をもっている。この葉や介抱で雄吾は日々快方に向い、その年の暮には全快した。彼が『覚書』で繰り返して当主甚平を称讃しているのは当然である。

暮に伊東家を辞そうとしたが、甚平がまだ身体の様子を心配してもう二カ月のばし、明治十一年二月の末にやっと世話になった家を出て佐土原に歸つた。まさに一年二カ月ぶりである。

ところが故郷では意外な悲惨事が彼を待っていた。それは彼の父喜右衛門が去年六月に死去したこと、家が戦火で焼かれたことである。あまりのことに暫らくは口もきけな

かった。喜右衛門が病死した頃は雄吾はしきりと紙幣製造をやっていたわけである。

継母と季乃はどうなったか、家が焼かれたのちどこへやら避難したことまでは分ったが、それから先がわからない。

雄吾は自分の幼少の友達の田中惣兵衛（これが『文化史展』に西郷札とこの『覚書』を出品した謙三氏の祖父）を訪れたが、ここでも事情は分らなかった。雄吾は季乃の消息なら母方の親戚でも探せば知れると思ったが、生憎その所も名前も訊いてみたことがなかった。彼はこれ以上、知りようもなく諦めねばならなかった。

もう、この地に居つく気持もなかったので雄吾は残った田島を全部金に換えて、さすがに早い桜や桃など咲き揃っている南国の春をすて悄然と立ち去った。

東京に向ったのである。

四

東京に出た雄吾はしばらく何をやる気力もなく、毎日を目暮しに暮した。

明治十一年の東京はこの二十二歳の若者をもっとも刺戟するものがあつた筈である。西南戦争以来政府のインフレ策で物価は高騰していたが、諸事業は勃興し人心は投機に熱中していた。事情は異うが昭和二十二年頃にどこかほうふつたるものがある。一方明治六年征韓論に敗れて以来、土佐に引込んでいた板垣退助が立志社を結成して、いわゆ

る南海の草廬より出て大阪に來り同志を糾合して愛国社と改称し、全国の壯士達に自由民権を謳^{うた}わせたのもこの年である。

だが樋村雄吾には昭和のインフレ時代の狸青年のような覇氣もなかったし、共產黨員のような昂奮もなかったから、無為のうちに日を送っていた。

そういう彼がある日不測の奇禍をうけたのはやはり運命というより仕方がないであろう。

ある日、正確にいうと明治十一年七月三十日のひる頃、雄吾はぶらぶら歩いて赤坂の紀国坂下を通りかかった。正午をすぎて空腹でもあつたし暑くもあつたので傍の茶店に入つて何かとつて食べていると、隣の席にこの真昼間から一人で酒を飲んでゐる若者がいる。彼はしきりと往來の方をむいて、何やら待っているような様子であつた。

やがて、向うからかつかつたる蹄の音を鳴らして黒塗りの二頭立馬車が近づいて來た。若い男は急に席を立て、二、三步馬車の方に歩み、その中を覗くように注視した。何事かと雄吾も少し興味をもつて馬車の方を見た。

車上には豊かな髻を蓄えた肥大な老人が背をうしろに悠然と凭^{たか}せている——と思つた瞬間馬車は車輪の音を地にひびかせて忽ち目の前を走り去つた。

若い男はやや暫らくそれを見送つたが、また席に歸つて來て再びゆっくりと盃をとり上げ、暑氣払いに一杯いかがですか、というのである。